

「しもべは聞きます」

サムエル記上
ローマ人への手紙

第3章1節～14節
第10章17節

説教 村上修平牧師

少年サムエルは、祭司エリのもとで育ちました。エリは年を取り、しだいに目がかすんで見ることができなくなりました。サムエルは、神殿でエリの手伝いをしながら神様に仕えていました。ある夜のことです。サムエルが神殿で寝ていると、「サムエルよ、サムエルよ」と呼びかける声が聞こえました。サムエルは起きて、エリの寝ている部屋に走っていきました。ところが、エリはサムエルに「わたしは呼ばない。帰って寝なさい。」と言いました。サムエルは不思議に思いながら帰って寝ると、再び、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声が聞こえました。やはりエリが呼んだのだらうと思ってもう一度エリの所に行きましたが、エリは「わたしは呼ばない」と言いました。

こんな事が三度も繰り返されたので、エリは、神様が少年を呼んでいるかもしれないと思い、サムエルに、もし今度呼ばれたら、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』（サムエル記上3章9節）と言うように教えました。そして、神様は4度目にサムエルを呼ばれました。サムエルが、「しもべは聞きます。お話しください」と言うと、神様はついにサムエルにお話しになりました。それは、エリとエリの息子たちに対する裁きの言葉でした。彼らは神様に仕える祭司でありながら、神様を軽んじ、礼拝の中で民が捧げる犠牲を横取りして私腹を肥やしていました。神様はその悪事を止めるように忠告しましたが、彼らは耳を傾けようとしなかったのです。

ここから、神様は相手が子どもでも大人でも、その人が聞くべき必要な言葉をきちんとお話しして下さることが分かります。それは神様が私たちのことを本当に大切に思って下さるからです。本人のためならば、言いにくいことでもはっきり言ってくれる人が親友であると思います。どうでもいい人ならば何も言いません。神様は私たちに語りたい、伝えたい言葉がたくさんあります。私たちに無関心でいられないからです。私たちの幸せを誰よりも願っておられるので、時には耳に痛い言葉でもはっきりとお話して下さるのです。エリの家族に対する厳しい言葉は、深い愛情の裏返しです。この言葉を聞いて私の所に帰って来てほしいという神様の切なる願いが込められているのです。

しかし、エリは神様の言葉を最後まで聞こうとしませんでした。エリは、「どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」（18節）と謙虚そうに言いましたが、これは無責任な態度であります。もし、本当に神様の言葉を聞いたのであれば、神様の思いを受け止め、自分はどうかあるべきかを考え直したはずで

私たちはいつでも、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』という態度が大切です。それは、ただ聞くだけでなく、神様の思いや私たちに対するご愛をしっかり受け止めることなのです。サムエルは幼い時にこの祈りの態度を学びました。そして、生涯、神様の語られる言葉を『聞く』ことに徹し、祈りの人として成長しました。強力な軍隊を持つ敵がイスラエルに何度も攻めてきた大変な時代に、サムエルは神様の御心に従って生きるように人々を励ましました。「主が彼と共におられて、その言葉を一つも地に落ちないようにされた」（19節）とあります。神様の言葉を聞こうとする者と神様は共にいまして、その行く道に祝福をもたらして下さるのです。

しかし、私たちは神様の御言葉をどれだけ聞き漏らしてきたことでしょうか。神様がせっかく語って下さる時にも、耳を傾けようとせず、自分の思いだけで突っ走っていることがあります。このように聞くことのできない私たちのために、主イエス・キリストは私たちの所に来て下さいました。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」。（ローマ人への手紙10章17節）信仰は、私たちの努力によって得られるものではありません。キリストが神様の思いを私たちの心に刻みつけて下さるのです。これは一方的な恵みであり、信仰はこの恵みを受け取り、キリストの言葉を聞くことから来るのです。

私たちが神様の御言葉を聞けない時も、キリストは私たちの内にあって、御言葉が一つも地に落ちないように働き、私たちに御言葉を届けて下さいます。だから、私たちはどんなに忙しい時も立ち止まって、「しもべは聞きます」と神様に聞きましょう。神様の思いを私たちの思いとさせていただきましょう。

（記 村上修平）